

# 全国農業教育研究会の50周年を迎えて

—これまでとこれから

内山雄平

## 1、はじめに

2021年、全国農業教育研究会（略して「全農研」）は、50周年を迎え、その記念すべき「記念誌」（2021年12月）を刊行した。これを機会に教育研究所から「全農研50年の活動」の原稿依頼を受けた。これまでの全農研の研究や運動をどうすすめたかを紹介し、その教訓は何か、今後の課題は何かを明らかにしたい。

## 2、発足の経過と当初の取り組み

「1971年東京で開催された全国教育研究集会に参加した農業の教員が中心となり全国の農業高校に呼びかけ「農高連」を組織し、会員の拡大とともにその

名を「全国農業教育研究会」に改め事務局体制を確立した。この研究会の趣旨に賛同し積極的にご支援、ご指導いただいた福島要一先生、鈴木芳夫先生、木下春男先生や佐々木享先生、暉峻衆三先生などすぐれた学者・研究者に、文部省の職業教育に関する教育行政や我が国の農業政策についての講演や講義を受け、学習・研究を深め互いの教育力量を高めてきた。

発足当時、教育現場で生徒の実習指導における農業高校特有の還元金制度の弊害、労働提供的な側面を持つ学校農場の「非教育的」運営の在り方、さらに実習職員の身分制度について実践交流を図り、教育的組織・運営の在り方を求め、すぐれた実践に学び職場の改革・改善を図ってきた。

### 3. どのような活動方針で

活動をすすめてきたか

#### (1) 活動方針

農業教育の国民的課題は、技術・職業教育としての農業教育と一般的教養としての農業教育とを二本の柱としています。この二つを遂行することを課題として、全農研は自らに課しました。

小・中・高一貫の農業教育と、地域に根ざした農業教育とは、この国民的課題を具体的に展開する二つの場です。私たちの実践をすすめる上で、いわば縦糸と横糸です。

全農研は、この縦糸と横糸を織りなす活動の実践によつて、次代を担う青少年に、あるべき農業についての正しい認識を育てることを目的として活動します。

農業高校の教育目標は、自営者養成を柱に掲げているものの、「自営農家」の養成を謳いつつ、国際貿易の自由化をすすめた「農業基本法」は、農業を荒廃さ

せ、逆に後継者の減少、農家の減少を極端に招いた。高校教育の多様化は、農業高校に矛盾が集中し、教育困難をもたらした。こうしたことが、農業高校の統廃合、学科改編に繋がり、現場の農業教員は目標を見失い苦悩に陥った。

しかし、全農研は農業教育を国民が誰でも等しく受ける国民的課題として位置づけ、農業教育の果たす役割を実践を通して明らかにするため、農業（農）の「小・中・高（大）」一貫教育を追究し、国民的教養としての大切さを問うてきた。それは、第40回福島大会における熱塩加納小学校の「農業科」の取り組みにも農の果たす教育的機能を見いだすことができる。地域に学校を開放することによつて、地域や住民による「農のもつ教育力」を引き出し、後述のように子どもたちの豊かな成長を育む教育実践が数多く報告されている。

#### (2) 具体的な展開

##### (1) 全国大会の開催

全国大会は、日頃の職場の実践交流を図つて互いの教育的力量を高める唯一の場であり、開催県ならではの

の著名な学者を講師として招き、時宜にふさわしい記念講演を年1回実施してきた。最近の心に残る大会を寄せられた感想をもとに紹介したい。新潟は過去3回開催した。(一)内は開催地。

○第28回熊本(水俣)・1998年、水俣・国民宿舎水天荘。講演「水俣が写す世界」原田正純(熊本大学)。農業にとって環境問題は密接不可分のものであり、水俣で開催することは農業と環境を一緒に考えなければいけないことを改めて考えさせることになった。原田講演の結語「かつて水俣で、絶望的な状況の中で、ひとりふたりの人間が立ち上がって、そしてこの状況を変えてきたのですから、私はこの水俣からの経緯からいくとまだまだ希望を捨ててはいけない。そういう意味で皆さんがやっておられる仕事も我々と共通するものがあると思う」と言う言葉に深い感銘を受けた。

○第40回福島(喜多方市熱塩加納)・2010年、熱塩加納総合支所・叶旅館。講演小林正芳氏。大会は、農業特区を生かし、全国で初めて小学校の教育課程に「農業科」を取り入れた喜多方市長の挨拶で始まった。支援員の小林さんの指導の下、熱塩加納小学校の子どもたちは、イネづくり、野菜の栽培を通して、「コメ

は人が作るのではない、コメを作るのはイネ、それを手伝うのが私たちだ。それをもらって生きている、命をいたたくことで生かされている」という。命を育てると同時に自分自身を育てている。

当地は、早くから地元の有機栽培で育てた、地場産給食を実施していることでも有名。

○第41回大阪(大阪園芸高校)・2011年、講演西村和男氏(元京都大学フィールド科学教育センター講師)「土の健康・作物の健康・人の健康」。2012年から実施される中学校技術科の「生物育成」を担当する教員向けに、全農研として初めて実技をともなう実技講習を実施した。

感想には「簡素な実験で土の特性や違いを知ることができ、是非授業に取り込めたい、ネタとしてはバツチリでした」「鍬やレーキの使い方について学んだ、自分流の使い方以外にいろいろな使い方があることを知って勉強になった」。この講習内容を冊子にまとめ中学校教員に普及を図ることを企画した(生物育成の手引きI・II)。

○第43回新潟(佐渡市トキ交流会館)・2013年、講演本間慎氏(東京農工大学名誉教授・佐渡出身)「ト

キと暮らす佐渡の人と自然」。この企画を佐渡市農林水産課長渡邊竜吾氏（現市長）にお願いした時、佐渡島民と共に研究・交流しあうのは初めてであり、全面的に協力・支援することを諒承してくれた。自らシンポジストを引き受け、「トキとの共生は『生きものを育む農法』トキと暮らす郷づくり』であり、自然との共生である」と報告。「トキを守ると言っているけれど、実はそれは農業を守り、生物を守り、子どもを守り、村や人、文化を守る哲学だ。だから教育は大切な。実に有意義なシンポジウムであった。」との感想をもらった。現地見学後、交流会館の上空にめつたに見られないというトキが飛翔する姿に感動を覚えた。

○第45回兵庫（養父市）・2015年。トキの郷佐渡と並んでコウノトリの郷豊岡。1971年絶滅した野生コウノトリを膨大な時間とエネルギーをかけ、46年（2007年）ぶりに野生復帰を遂げたのは、コウノトリが棲める豊かな環境をつくることであった。私たちの心と体に染みこんだ生活様式と価値観の捉え直しであり、コウノトリが棲める豊かな環境は、人間にも持続可能で健康的に暮らせる環境でもある。それは、農業や化学肥料を使わず、田んぼの様子を見抜き、農

業をやりながら多様な生物を育む「考える農業」—環境創造型農業に向かわせ「コウノトリ育むお米」を生み出した。「ふるさと教育」の副読本が全小中学校で総合的学習に活用され、学校農場などでの栽培体験など、コウノトリの導入教材をもつ但馬地域の環境教育はおおきく広がっている。コウノトリの力は、農業を、地域を、教育を、文化を変ええる力となっている。

○第47回栃木（真岡市）・2017年、黒田洋一氏（環境脳神経科学情報センター代表）講演「ネオニコチノイド系農薬と発達障害」。脳の発達の中で、ある神経回路だけが傷つけ特定の行動だけが上手くできない環境要因は何か、環境化学物質とネオニコチノイド系などの農薬が脳の発達に異常を起す要因があること。あらゆるものが経済、効率、利益優先になり、目先の効果だけにとらわれた結果、農薬の毒性、化学物質の副作用が確実にヒトに悪影響を及ぼしている。これに対し、農薬なしでしかも科学的（2回の代掻、浸水管理）に自然を尊重し持続可能な農法を研究し、「命を育む」農業を実践して成功していること（「栃木の環境保全型農業の歩みとその担い手く何故有機農業をめざすか」をテーマに5人のリレートーク）。有機農業が本

来の農のあり方だと実感し、目からうろこの二つの講演でした。

○第48回京都（京都教育大学）・・・2018年、「人を育てる農と食―京の伝統の農と食を学ぶ」を基本テーマに、土屋英男氏（京都教育大学名誉教授）湯川夏子氏（京都教育大学教授）の講演。小中学校・高校大学院生によるリレートーク「私のめざす食と農の教育」さらに、京料理の専門家竹中徹男氏による参加者全員の、京の伝統野菜の調理実習を実施。土屋氏より農業・栽培・飼育教育の意義、目的を通して教育基本法に銘記の「人間の陶冶」を達成する手立てを学んだ。湯川氏からは農作物を育てるだけが農業教育と考えがちであるが野菜など利用する消費者の側面から捉えることの重要性を知った。中学校技術家庭科教員、栄養教員、大学で技術家庭科の学生など女性の参加が多く、多様な顔ぶれに新鮮みを感じた。「農」から「農と食」教育への展開に―食農教育という今日的課題にふさわしい大会となり、新しい境地を切り開くことが出来た。

○第49回長野（安曇野市ほりてくゆ四季の郷・松本大学）・・・2019年、講演は白戸洋氏（松本大学総合経営学部教授）大野整氏（松本大学総合経営学部教授）、

池上洋助氏（上野原農園土壌環境技術研究所）。白戸氏の地域の後継者をどう育てているか、「地域に出て地域の課題を解決して貢献する」「地域に迷惑をかけながら学生を育てる」、地域も一緒にやって地域に留める子どもたちを育てる、大胆な地域との関わり方を学んだ。池上氏は土壌分析をもとに土壌の状態を正しく知って施肥を決め、荒廃したかつての桑園15haを再生、うち10haのぶどう園によりみがえらせた。牽引力は氏を中心とした市の農業委員全員だったという。これこそあるべき本来の農業委員会の姿である。

農家民泊の現地報告は、「うれしかった、涙がでた。農体験で子どもたちが育ち姿を温かく報告された。農で育ち、農家で育つ」。農業の教育力よりも農家（豊かなものをもっている）の教育力はすごい、農家教育力のある、人間的な触れあいの中で生徒が学んで変わっていくことに目が開かれた。

## (2) 得がたい実践レポートの要旨

数多くの教育実践レポートは、これまで機関誌「会報」（No.11289）や研究誌「農業教育研究」（No.145）に報告されている。この中から得がたい実践レ

ポートを紙幅の關係で紹介は次の1編とし、他は文末資料2に掲げた「図書紹介」を参照されたい。

○農業教科の「授業開き」く農を選んで大正解 学び方が違うと思つてくれたらすばらしい」

曾我一作（兵庫・前豊岡総合高校）

① 農を選んで大正解：新入生オリエンテーションや専門科目の授業の最初に、黒板に大きく「大正解」と書く。「人類が誕生して、700万年と言われるが、さて、農、工、商のうちどれが一番早かつたか」と問いかける。きよとんとするが、ほとんどの生徒は農業と答える。工業に数名。商業はほとんどいない。「なぜ、農か」と問う。「食べなければ生きられない」などの声。工と答えた生徒からは「家や槍がなければならぬから」。「他の動物は農をしなくても食べているよ。猿人や原人もはじめは他の動物と同じだったのじゃないの」などと、採集生活を頭に描かせる。「実は農が一番新しい技術なんだ」生徒がおどろくところまで掛け合えれば最高なのだが。

② 学び方違う：「中学までの学び方と、農の学び方は違うんだ。これまでの学習で、花を開かせることのできなかつた人は、この学び方で花を咲かせよう」

「先生は作物。一方的に教わるのではなく、現物に触れ、世話をし、愛情を注ぎ、観察をする中から、法則を見つけ、自分のものにする学習である。感心した

ことや不思議に思つたこと等々の、知的好奇心を大切にする学習だ。そのために、皆さんにレポートを多く要求する。レポートに「何を見つけ、何に感心し、何に疑問を持つたか。書いて欲しい」、同時に「新しい教科で、みんなスタートは同じだ。だから、興味を持つて作物や家畜に入り込んで欲しい。そうすれば必ず、これまでの自分ではない自分を見つけることができる」。

こうした学びが、意欲をかきたて、大きく変わった生徒の例を話しながら、訴える。これが意外に生徒の心に入るようで、決意を感想に書いてくる。

③ スタートは農場：4月はまさに農繁期。適期栽培が最高の技術だけに、1日でも早く、圃場に出たいもの。生徒も新しい教科と先生にワクワク感を持っている。私は「牛が先生」「野菜が先生」等と言って、圃場や牛舎で授業を行つてきた。授業開きから、圃場に出ることになる。スタートが圃場というのは、生徒も開放感に浸れる時間となり、ワクワク感をさらに増す手でもある。

④ ワクワク感をつなげる学習展開：授業開きで大見得をきり、ワクワク感を増しただけに、裏切らない学習展開が必要である。私は「作物が先生。先生の居る所で授業をうけるのは当然」と現場での学習を重視してきた。農業の特性は命と向き合うことである。世話をして、成長を楽しみながら、また人間にない生物のすばらしい能力に感心しながら、科学的真実を掴ませる系統性を持たせる展開を今も追求している。

⑤ 農業が難しい技術なのは：「種は動物にとつては何だろう。最高の食べ物やな。また、発芽した若葉は柔らかくておいしいので、これも最高の食べ物や。だから、他の動物が農業を発見できなかったんだ。」種がスイカになる。キュウリになる。こんな発見がいつ頃あったんだろう？」掛け合いながら、考えさせる。

このような、人間の歴史、技術の歴史などを話すことができたらしい。農業がそんなに動物にとつて難しい技術であることを、生徒から引き出すのはかなり困難である。

最後に「種がスイカになる。キュウリになる。そのため、完全栄養食品である種を食べずに、土中に置いておく。若葉も食べずに我慢する。いわゆる『待つ

技術』のすばらしさ。待てるのは、頭の中で『スイカ』をイメージできるからで、将来を『見通せる技術』のすばらしさだ。これが他の動物にできなかったし、原人もできなかった頭脳技術ではなからうか」答えらしきものを提示することになる。

⑥ 農業の発明で社会は大きく変わった：農業が発見されてから、世界の人口は急速に増えた。農は1人が働けば、1人以上分の生産をする。大変な技術だ。なぜ、1人以上作れるのか。今のような社会の基礎に農業がある。これまでの人間の歴史を理解するためにも、農業を理解することが大切で、それを学ぼうとしている君たちは正解なんだ。ここまで、訴えて大正解と大見得切った意味となる。

### (3) 「生物育成」実践の手引きの発行

2012年開始の中学校技術家庭科「生物育成」に関して実技指導の手引きⅠ・Ⅱを刊行した。全農研はすべての子どもたちに「農と食と環境の教育」の実現をめざし、小中高一貫した農業教育が行われることをめざした取り組みである。

(4) 50周年記念しての取り組み

「50周年記念誌」の発行(2021年12月)、「会報」(No.1~289)及び「農業教育研究」No.1~15)の総目録を収めたCD版の作成(2022年3月)。なお、「50周年記念誌」については、日本民間教育連絡会発行の「民教連ニュース」に紹介される。80頁参照(2022年7月)

4 まとめにかえて

50周年の歩みを振り返り、2点明らかに出来たと思う。

第1点目は、子どもの成長発達にとって、農の果たす役割の大きさである。

全農研は、設立当初から自主編成運動を掲げ、自らの教育実践をここに焦点をあてて取り組んできた。その典型例が、県の方針に抗して兵庫の普通科分校に農業教育をすすめた実践に見ることができる。それは、全農研は「農業教育」を小中高一貫教育に位置づけ、国民的教育課題として追究し、学校を地域に開放し、農の地域のもつ教育力を生かすことが、子どもたちが学び、成長し、発達する、ヒトがヒトとなる。50回に

およぶ全国大会などの実践レポートでもあきらかとなり、今後広くこの教育的価値を国民と共有したい。

第2点目は、今後の農法のあり方に関わって、有機農業の果たす役割である。

新自由主義による市場原理主義は、大規模化、農薬や化学肥料の多投を招き、自然環境を壊し、食料の安全性を損ねる結果となった。近代化農法の破綻である。黒田さんの研究によつて、ネオニコチノイド系の農薬が、脳を壊し発達障害が明らかとなった。稲葉さんの提唱する、農薬を使わず安全安心の農法が確立しつつある。今後の農法のあり方を端的にしめしている。

国連は環境保全型の農業をめざし、小規模・家族農業に舵を切り、家族農業10年を決議した。循環型の農業をすすめるにアグロエコロジーに活路を見いだしている。今ロシアのウクライナ侵略で食料不足となり食料危機が叫ばれ、我が国の自給率37%は、国民の命を危うくする。今こそ、私たちの責務は大きい。



紹介の本

# 『全農研50周年記念誌』

2021年12月 50周年を記念して刊行

本著は、草創期、全農研と私、実践集、50年のあゆみで構成されている。その概要を紹介する。

## 「草創期」

1971年1月全国教育研究会東京大会に参加した農業教員が中心となり、全国の農業高校に呼びかけ「農高連」を組織し、会員の拡大とともに名称を「全国農業教育研究会」に改め事務局体制が確立された。

## 「全農研と私」

年一回の全国大会や地域教育研究会などの教育実践交流を通して、代表の福島実一氏（元日本学術会議会員）や鈴木芳夫氏（筑波大学教授）から指導を受け、日頃のすぐれた実践家との出会いがその後の教育力量を高め、貴重な体験を蓄積してきた。食や農業の未来を築こうとする諸団体の運動を根底から支える、そんな『礎的役割』を果たす存在である。

全国農業教育研究会（略して「全農研」）編

## 「実践集」……農の教育力を引き出す

○百姓になれ…百姓の心にも触れさせたくて、『百姓になれ』を合い言葉にすすめた小5の総合的学習「米づくり」。子どもを生産者の立場にたたせようと、地域の力を借り代掻き、水の管理、収穫、脱穀、精米まですすめ、収穫祭には地域の祭り（御輿、獅子舞、餅まき、出店）を立立て、穫れた米で地域の伝統的な食文化（餅草、きな粉、豆餅）を学び、風習（花餅づくり）にまで発展させている。

○分校普通学科学で農業を学ぶ…「入学した時、普通科でありながら農業学習は、灰色の実習服を着るだけで拒絶反応を持つほどだった。しかし、2年生でナスの栽培から楽しさが出てき3年生でイネの栽培研究班に入った。この研究は農業改良普及

所の依頼で、国の事業の一環であると聞き、「必ずよい結果をだしたるわい」と、やる気がわいてきた。秋の文化祭ではこの調査・研究をまとめて発表し、これが新聞にまで報道され、成功させた。普通科で農業を取り入れることによって得た、仲間づくりや全校集団作りは他校に負けない。こんなに地域との結びつき強い学校は、全国津々浦々探してもないのではないかと。今では本当によい学校であったと思う。」

生徒の声から、農業のもつ素晴らしい教育力を感じずにはいられない。学び方や、学ぶことの意味、学力とは何か、地域における学校の役割は何か。普通科で農業を教えるなかで、生徒たちは多くのことを教えてくれた。

○幼児教育保育学科で農を学ぶ学生…「土を作って、そこに種を植えて、鶏糞、落ち葉を使う。種のできたのが曲がった野菜、農薬なしの野菜。これがおいしい。そのおいしさは色々。微生物、昆虫、太陽、水。」「愛情をこめて、一生懸命に育てると、野菜もそれに答えてすこく

美味しく実つてくれる。高く売るためにキレイな形、見た目にこだわって農薬を使っている野菜は「良い野菜」というより「良いように見せかけてる野菜」だと思ふ。人間が人間の食料（命）と健康を保つために必要なもの。虫に食べられたら、体に有害な物を使つてはダメなんだよ。虫に食べられたら、それが「自然」なんだよなあって感じた。「ひとを農を通して自然、命、心、環境と目を開いていく。あらためて農の教育力に感動。」

会員は、小・中学校、高校（農業科、普通科）、農民、出版社、研究者で構成。2ヶ月に1回発行する機関誌「会報」は289号、研究誌「農業教育研究」45号。これらの総目録をCD版に取めた。頒布1000円。お求めの方は、左記、全農研事務局のEメールに御連絡下さい。

Yon-hej@hw.wakwak.com  
(内山雄平)

全国農業教育研究会  
50周年記念誌



2021年12月  
全国農業教育研究会

(うちやま ゆうへい・全国農業教育研究会事務局長)